**シュリー・ラーマクリシュナの神聖な一触れ**

2010年8月15日

逗子例会

スワーミー・メーダサーナンダによる講話

於・逗子協会

　「タッチストーン」という石を知っていますか。この石には特別な力があり、この石に触れた金属はすべて金（きん）に変わると信じられています。古代エジプトの有名なアレクサンドリア図書館が火事で焼け落ちたとき、唯一焼失を免れた本がありました。この本は特に重要なものではなく、学者でない者にそこそこの値段で売り渡されました。ところが、この本の表紙の裏にはこう書いてあったのです。「黒海に行くと岸辺に多数の小石があり、その中にタッチストーンがある。タッチストーンは触ればすぐに分かる。普通の石は冷たいがタッチストーンは温かい」この本を買った者は金属を金に変えて大金持ちになりたいと強く願い、持ち物をすべて売り払うと、タッチストーンを探しに黒海へと旅立ちました。さて、この話はここまでにしましょう。単にタッチストーンとは何かをお話ししたかっただけですから。

**神の化身が触れる**

　シュリー・ラーマクリシュナはこう言われたことがあります。「金（きん）になりなさい。タッチストーンに触れて自分を黄金に変えなさい」この「タッチストーン」とは、もちろん神様のことです。神に触れ、神を悟ることにより、金になる、すなわち霊的になるのです。神様だけでなく、シュリー・ラーマクリシュナやキリストのような神の化身に触れても金になることができます。これについてはシュリー・ラーマクリシュナにまつわる逸話がいくつかありますので、後でお話ししましょう。中には英語や日本語には訳されていない話もあります。

　私たちは毎日、誰かに触れる機会がありますが、人に触ったからといって特に何が起こるわけでもありません。しかし聖書には、イエス・キリストが触れただけで人々が癒されたという例がたくさん出ています。例えば、新約聖書には皮膚病を患っている男性がイエスの所に行く話が出ています。彼はこう言います。「御心ならば、わたしを清くすることがおできになります」するとイエスは言いました。「よろしい、清くなれ」そして彼の体に触れると、病気はたちどころに治りました。イエスが浄めたのは彼の肉体だけではなく、彼の精神をも純粋にしたのです。また、長年呼吸の病気を患っていた女性は、イエスの着ている衣服の端に触れれば病気が治ると信じていました。彼女が手を伸ばすとイエスは振り向き、その信仰心に気付いてこう言いました。「娘よ、あなたの信仰があなたを救った」その瞬間、彼女の病気は治ったのです。

**物質的な奇跡**

　これらの例は大きく二つに分けることができます。イエスが相手に触れた場合と、相手がイエスに触れた場合です。神の化身に触れることで、不完全な人間は完全な人となり罪人は聖人になることができます。ここで、奇跡とは何かを考えてみましょう。説明のつかないことが起きたとき、私たちはそれを奇跡と呼びます。遠く離れた所にあるものが見える、聞こえるとか、人の心が読める、何かを消す、何もないところから何かを出すことなどを奇跡と言います。また、不治の病と宣告された人の病気を治す場合も奇跡と呼べるでしょう。このような奇跡は、世俗的なこと、物質的なことに関係があります。

　シュリー・ラーマクリシュナは、このような「奇跡」は霊性とは関係がないと批判されていました。このような「奇跡」を求める人は、実際には霊性を育むことはできず神を愛することはできないと言われました。さらに、このような特別な力を得ると人はおごり高ぶり、最後には霊的に堕落します。イエスはいつも、自分の行う奇跡はすべて神からのものであり自分の力のなせる業ではないと言っていました。そして、このような力の源である神を信じ、精神的、肉体的、そして霊的に浄（きよ）まるように、と人々に呼びかけました。シュリー・ラーマクリシュナは「奇跡」を批判したものの、多くの人々に何度も奇跡を行いました。これは矛盾しているでしょうか。

**サムスカーラ**

　スワーミー・ヴィヴェーカーナンダは、奇跡にはいろいろな種類があるが、最高の奇跡は人の心を変えること、心を浄めて怒り、おごり、欲、妬みの気持ちを消すことであると言われました。心は石のようなもので、とても固く釘を打ち込むことはできません。しかし、シュリー・ラーマクリシュナにとっては人の心は粘土の塊のようなもので、ちょうど陶工が粘土で壺を作るように人の心を思いのままに形作ることができたのです。インド哲学にはサムスカーラという概念があります。これは、今世やこれまでの数多（あまた）の前世で同じことを繰り返し考えたり行ったりしたために心に残った印象のことです。このサムスカーラはインド哲学独特の概念で、今世で私たちが取る行動の多くはこのサムスカーラが原因です。よい考えを何度も繰り返し思えばよいサムスカーラが生まれ、反対に、悪い考えや行いを今世でも前世でも繰り返すと悪いサムスカーラが生まれるのです。サムスカーラを変えることは大変に難しいことです。

　普通の人にはこのことは理解できません。霊的な生活で進歩したいと努力している信者だけが、変わること、サムスカーラをよりよくすることがどれほど難しいか知っています。スワーミー・ヴィヴェーカーナンダは、よいサムスカーラを前世から引き継いでいれば悪いことをしたくてもできないと言われました。逆に、悪いサムスカーラを持ち越してきた人にとっては、心の中に葛藤や誘惑が生まれるためよいことをするのは大変難しいのです。ですから、最高の奇跡というのは、触れるだけで悪いサムスカーラを変えてよいサムスカーラ、霊的なサムスカーラにすることです。シュリー・ラーマクリシュナはそのような奇跡を何度も行っています。シュリー・ラーマクリシュナにとっては、人の心は粘土の塊のようなもので、望んだとおりに形を変えることができるのです。

　不治の病を治したり欲望を満たしたりしたところで、病気や欲望はまた生じるわけですから、そのような物質的な奇跡には一時的な効果しかありません。しかし、最高の奇跡は人を永遠に変え、霊性、永遠の平安、喜び、神の知恵を授けることができるのです。では、シュリー・ラーマクリシュナが行った奇跡の例を一つお話ししましょう。

**ラーマクリシュナに触れられたカーリパーダ**

　ある日、ある信者が友人の一人をシュリー・ラーマクリシュナの所に連れて行きました。この友人はカーリパーダと言い、酒好きの非常に世俗的な人間でした。よい収入を得ていながら家族の扶養をないがしろにすることがあり、その上ホテルに住んで大変世俗的な生活を送っていました。信者がカーリパーダを紹介するとシュリー・ラーマクリシュナはカーリパーダにこうお尋ねになりました。「お前は何が欲しいのかね」カーリパーダは調子に乗って、とびきりいいワインが欲しいと答えました。この不作法ながらも率直な答えをシュリー・ラーマクリシュナは気にされる様子もなく、こうおっしゃいました。「よし、私は特別なワインを持っているよ。でもお前に耐えられるかな」カーリパーダは興味津々にどんなワインかあれこれ聞きました。シュリー・ラーマクリシュナは、西洋の普通のワインではなく自家製のワインで非常に効く強い酒であると説明されました。カーリパーダはますます興味をそそられ、自分は酒に強いばかりか酔っ払って前後不覚になるのが好きだと言いました。そこでシュリー・ラーマクリシュナがカーリパーダに触れると、彼は突然様子が変わりしくしくと泣き始め、いつまでたっても泣き止みませんでした。

　実はこれはただ泣いているのではありませんでした。カーリパーダは生まれて初めて、自分がどれほど低俗な人間に落ちぶれたか気付いて後悔したのです。そして理想的と言えるほどの純粋な霊性が心の中に現れたのです。実のところ、私たちは誰もが皆純粋なのですが、この純粋性は埃をかぶっているのです。もし運良くシュリー・ラーマクリシュナの神聖な一触れに預かることができれば、私たちの純粋性や霊性は即座に現れるのです。これこそ最高の奇跡ではないでしょうか。

**聖なる効き目**

　シュリー・ラーマクリシュナの聖なる一触れが引き起こす現象についてよく考えてみましょう。これには「触れる、伝える、変える」の三つの要素があります。日常生活で誰かに触れることはよくありますが、これは単なる皮膚の接触です。肉体（分子の塊）が別の肉体に接触しているだけであり、特にこれと言った変化や効果はありません。しかし、時には接触が重要な意味を持っていることがあります。母親が我が子へキスしたときや恋人同士がキスしたとき、あるいは信者が神父の手にキスをしたり（キリスト教の習慣等）、信者が僧侶の足に触れたり（インドの習慣等）したとき、このようなときには愛、思慕、浄めなど何らかの効果が確かに生まれています。例えば、私がフィリピン・ラーマクリシュナ・ヴェーダーンタ・ソサエティを訪ねたとき、男性信者が私の手にキスをしたことがあります。これは私にとって予想外の出来事でしたが、このような振る舞いは現地の伝統的習慣なのだと知りました。このような行為は、浄めや恩寵など何かしらの変化を求めて行われるのです。

　このような変化を与える源はいったい何なのでしょうか。それは、触れあう人同士の心、思考、感情です。子供に変化を与えるのは、その子にキスをし、抱きしめる母親の思考や感情なのです。では、母親の心や思考、感情はどうやって子供に影響を与えるのでしょう。それは、思考や感情が生み出す波動によるものです。しかし、このようにして生じる変化がどれほど強いものであっても、影響を受けるのは肉体と心のレベルまでであり、魂のレベル、すなわちアートマンにまで影響を与えるわけではありません。ところが、聖人や神の化身の聖なる一触れはもっと深く届き、異なる変化をもたらします。

触れられた人を浄めたり変えたりする、あるいは神のビジョンや神との合一をもたらすこともあるのです。

　普通の心と肉体を持つ普通の人ではこのような影響を与えることはできません。このようなことができるのは、聖人や神の化身のような特別な肉体と心を持った人だけです。これは、電気を伝えるのと同じです。高電圧の電流を流すには普通の電線では焼き切れてしまいます。高電圧用の特殊なワイヤが必要になります。インド哲学では、私たちの肉体はサットワ、ラジャス、タマスの三種類のグナでできていると言われています。ラジャスは粗大でタマスはさらに粗大ですが、サットワは精妙です。普通の人の肉体はほとんどラジャスやタマスでできており、そのため粗大な波動しか認識したり伝えたりすることができません。厳しい霊的修行を長期間行うことで、肉体は次第にサットワの性質となっていき、より精妙な霊的波動の認識や伝達ができるようになるのです。

　触れることにより、このようにして変化が伝わるわけですが、「伝える」には伝える側だけでなく伝えられる側の力も問われるということを忘れないで下さい。信者が聖人に恩寵を求めても必ずしも恩寵が与えられないのは、こういう理由があるからです。聖人が恩寵を伝えても、受け取る側にその準備ができていないのです。霊的なものを伝えられてそれを受け取る準備ができているかどうか、人の外観で判断するのは非常に難しいものです。しかし、聖人や神の化身には、人が心の奥底で考えていることがはっきりと分かるのです。

　カーリパーダの例を考えてみましょう。見た目は非常に世俗的な人間でしたが、シュリー・ラーマクリシュナには、彼の内面は大変純粋で聖なる一触れを受け取る準備ができているのが見えたのです。聖人や神の化身との接触は床屋などで日常に起こるわけですが、実は、霊的な変化は自動的に生じるわけではありません。与える側である聖人、神の化身が与えようと意識しなければ霊的影響は伝わらないのです。コシポルでシュリー・ラーマクリシュナの導きによりスワーミー・ヴィヴェーカーナンダが体験したニルヴィカルパ・サマーディの場合、シュリー・ラーマクリシュナはヴィヴェーカーナンダにこう言われました。「鍵は私が持っている。お前はこれを再び体験することはできないよ。初めにマーの仕事をしなければならないからね」

**ラーマクリシュナに触れられたヴィヴェーカーナンダ**

　スワーミー・ヴィヴェーカーナンダにシュリー・ラーマクリシュナが聖なる一触れを与えた記録は、四回残っています。最初は、ナレンドラナート・ダッタ（後のスワーミー・ヴィヴェーカーナンダ）がシュリー・ラーマクリシュナのもとを二度目に訪ねたときのことでした。シュリー・ラーマクリシュナに触れられて、ナレンは部屋の壁やあらゆるもの、自分の体までもが動き始めて無へと消えていくのを目にしました。ナレンは恐ろしくなりシュリー・ラーマクリシュナに向かって叫びました。「何をするのですか。私には父も母もいるのです。私は死んでしまう！」シュリー・ラーマクリシュナは、スワーミー・ヴィヴェーカーナンダと出会い始めた頃に、ニルヴィカルパ・サマーディの体験を与えたいと考えたのです。しかし、スワーミージにはまだ準備ができておらず恐ろしくなってしまったのです。ですから、シュリー・ラーマクリシュナは再びスワーミージに触れて、通常の状態に戻しました。

　二度目にナレンがシュリー・ラーマクリシュナの聖なる一触れを与えられたとき、ナレンはもうあんな目に遭わされないぞとしっかり構えていました。しかし、これも役には立たず、シュリー・ラーマクリシュナに触れられた途端、ナレンは外界の意識を失って心が内なる意識へと深く潜っていったのです。この状態で、シュリー・ラーマクリシュナは、スワーミージが本当は誰で、今世に生まれ変わった目的は何で、この肉体にどのくらい留まるつもりかを尋ねました。スワーミージはこれらの質問にすべて答えたのです。

　三度目は、シュリー・ラーマクリシュナがコルカタのある信者の家を訪ねたときのことでした。ラーマクリシュナはその家でナレンにあって歌を歌ってもらおうと思っていたのですが、当日ナレンはひどい頭痛で来られそうにありませんでした。そこで、ラーマクリシュナは数人の信者に頼み、ナレンを手助けしてその家まで連れて来させました。シュリー・ラーマクリシュナがナレンの頭に触った途端、ナレンの頭痛はたちまち治り、彼はずっと歌い続けることができたのです。

　四度目は、ダクシネシュワルでシュリー・ラーマクリシュナが聖典の内容について説明をしているときのことでした。ギャーナ・ヨーガの道を進んでニルヴィカルパ・サマーディを経験するとすべてが神に見えると話したのです。神は一つ一つの中にいらっしゃるだけでなく、すべては神でできているのだと説明しました。ベランダでこれを聞いていたナレンと疑い深いハズラは、笑い出しました。「どうやったらこれが神になれるんだ？この水差しも神、この壺も神だというのか？何と不条理な」シュリー・ラーマクリシュナは彼らの笑い声を聞きどうしたのかと尋ね、彼らの言葉を聞くや否やナレンに触れました。その途端、すべてが本当に神であることが明らかになったのです。車は車でなく、道路も道路でなく、すべてが神でした。ナレンが家に帰ってからも、母親の出してくれた料理は料理ではなく、食器も食器ではなく、母親さえも母ではなく、すべてはブラフマンでした。この状況は数日続き、若いナレンは聖典に書かれた真実をもはや否定することはできませんでした。

**メッセージ‐隠れた意味**

　今度は、信者がシュリー・ラーマクリシュナに触れた全く違う例をお話ししましょう。ラカール・チャンドラ・ゴーシュ（後のスワーミー・ブラマーナンダ）がシュリー・ラーマクリシュナのもとを訪れるようになって間もない頃のことです。ラカールは大変裕福な家の息子で、家では召使いに身の回りのことをやらせていましたが、シュリー・ラーマクリシュナに足をさすってくれと言われました。ラカールは、それは召使いのする仕事だと言って断り、自分は師が神について話すのを聞きに来たのであって、召使いの仕事をやりに来たのではないと不満げに言いました。が、師が何度も頼むので、彼は仕方なく師の足をさすり始めました。

するとその途端、ラカールの前にカーリ母神が現れました。母神は師の周りをぐるぐると歩くと師の体の中に溶け入って行ったのです。ラカールは驚きのあまり言葉も出ませんでした。するとシュリー・ラーマクリシュナが彼をからかうようにこう言われました。「ラカール、これで聖人の足をさするとどんなことが起こるのか分かっただろう？」

　『シュリー・ラーマクリシュナの福音』には師が誰かに足をさするよう頼む場面がよく出てきます。足をさすることには何か意味があるのだろうかと思うかもしれません。表面的な理由としては、師が単にお疲れになったからなのですが、その裏には、その信者に恩寵を与えたい、霊的な目覚めを授けたいという師の願いがあるのです。スワーミー・アドブターナンダジ（元の名はラトゥ）は学校に通ったことがなく字が読めませんでした。スワーミーは召使いの仕事をしていましたが、聖職者になりたいと思っていました。何年か師に仕えていましたが、その仕事の一つは師の頼みで足をさすることでした。ある時スワーミーが師の足をさすっていると、師がこうお尋ねになりました。「ラトゥ、お前のラーマ（ラトゥのイシュタ〈個々人が礼拝する神〉）が今何をしているか分かるか」神であるラーマが今何をしているかなんてどうやって分かるのかと思いながら、ラトゥは答えました。「いえ、分かりません」すると師は言いました。「お前のラーマは、今針の穴にラクダを通しておられるぞ」後にスワーミーはこの言葉の意味を次のように説明しました。「私の霊的レベルはそのとき非常に低かったのだが、シュリー・ラーマクリシュナは私にお触れになることで霊的な力をたくさん私に伝えて下さったのです」このことを師は、不可能な業を為しているという意味で「針の穴にラクダを通す」と表現されていたのです。

**レスリングの対戦**

　スワーミー・ヴィジュニヤーナーナンダは、出家する前は建築士や技師として仕事をしており、スワーミー・ヴィヴェーカーナンダの発案と指示によりベルル・マートに建てるラーマクリシュナ寺院を設計しました。スワーミー・ヴィジュニヤーナーナンダは、若い頃ダクシネシュワルに何度かやって来ました。ある時ハリ・プラサンナ・チャタージ（スワーミー・ヴィジュニヤーナーナンダ）が、他の信者や訪問客と共にシュリー・ラーマクリシュナと話をしていると、いつの間にか皆がいなくなって自分と師が二人だけになっていました。突然師はお尋ねになりました。「レスリングを知っているか」ハリは聖人からこんな思いがけない質問をされてびっくりしましたが、実際にレスリングを少しやったことがあったので、はい、と答えました。「よし、じゃあ、ちょっとやってみよう」ラーマクリシュナはこのとき衰弱して弱った状態で、一方のスワーミーは若い盛りでしたが、師が言い張るのなら仕方ないとスワーミーは師の挑戦を受けて立つことにしました。スワーミーが両手で師を壁に追いやると師はスワーミーの肩にぐっと手を押しつけました。

その途端、スワーミーの体から力が抜けていき、同時に大きな喜びの気持ちが全身に広がり圧倒されました。シュリー・ラーマクリシュナは「ほら、私の負けだ。お前の勝ちだよ」とおっしゃいました。後になって、スワーミー・ヴィジュニヤーナーナンダジはこの出来事を回想し、自分は結局シュリー・ラーマクリシュナを師として受け入れたのであるから、本当に勝ったのは自分ではなく師だったと言いました。

　この場合も、周りから見たらふざけてレスリングをやっているだけのようですが、実際にはシュリー・ラーマクリシュナには恩寵を授けるつもりがあったのです。このように、師のような神の化身の考えや行為は本当に理解するのが大変難しいのです。師自らが説明する、あるいは知性ある信者が自分で気付く場合を除いて、普通の人には師の行為を理解するのはほぼ不可能と言えるでしょう。スワーミー・ヴィジュニヤーナーナンダジが説明しなかったら、師がお触れになる深い意味を周囲の人が理解することはできないでし

ょう。

　スワーミー・サラダーナンダジは、ラーマクリシュナ・マートとラーマクリシュナ・ミッションの初代書記長で、後に『シュリー・ラーマクリシュナの生涯』を執筆されましたが、僧院の設立当初は大きな責務を背負っていました。スワーミーがまだ僧になる前、ある時シュリー・ラーマクリシュナは年若いシャラト（スワーミー・サラダーナンダ）の膝の上に突然乗ったことがあります。実はこれは、この青年が将来僧となってどれだけの重みを背負うことができるか試していたのです。あるいは、スワーミーの強さを試していただけでなく、将来の重責に備えて力を伝えていたのかもしれません。

　ある時、宗教上のお祭りの際にシュリー・ラーマクリシュナはある信者の家を訪ねました。家では霊的な議論が繰り広げられ、信者らは神や神の恩寵などについて語り合っていました。その中に、聖典の学者でありながら無神論者であると宣言する者がいました。

師はその学者に突然お触れになりました。そして、勉強したのにどうして神を信じないのかとお尋ねになりました。学者は師に摑まれた途端、前言を撤回して本当は自分は神を信じているのだと言い始めました。ここでも、師の一触れで無神論者が神を信じるようになったのです。師はよく、エゴ（自我）の大きいために神から遠ざかっている人がたくさんいる、神への信仰を打ち立てるのにエゴが最大の障害である、と仰っていました。当時、エゴに邪魔されている人にシュリー・ラーマクリシュナがお触れになると、エゴは途端に小さく縮んで彼らは神を信じるようになったのです。『シュリー・ラーマクリシュナの福音』の中で師が人に触れることが多いのは、こういう理由もあるのです。

**考えただけで伝える**

　先ほど、シュリー・ラーマクリシュナが触れただけで相手に霊的体験をさせる例をいくつかお話ししました。さらに、カーリパーダの場合は、酒好きな性質が変わってしまいました。このように性質が変わってしまう例には、ヨギン・マーに関係する話もあります。ヨギン・マーはシュリー・ラーマクリシュナへの信仰心が非常に厚く、後にホーリー・マザーの所に住んでマザーにお仕えしました。ヨギン・マーがまだ自分の家にいた頃、師は彼女の家をたびたび訪れましたが、彼女の兄弟はなぜか師の訪問を快く思っていませんでした。家の近くにマンマータという名のごろつきが住んでいました。この男は近所にいざこざがあった時に解決する、言わば用心棒のような仕事をしており、ヨギンの兄弟ヒララルはこの男を雇ってシュリー・ラーマクリシュナを脅させました。ところが、師の言葉を少し聞いた途端、マンマータは師の足下にひれ伏して許しと救いを乞い始めました。師はダクシネシュワルに来るように言い、マンマータは友人（後のスワーミー・アカンダーナンダジ）に連れられて師のところにやって来ました。マンマータが友人に紹介されて師の前に立つと、師は指で彼の筋肉に触れて強そうだねとおっしゃいました。この一触れで師はマンマータに恩寵を授け、彼はそれから大変高徳な人になったのです。

　シュリー・ラーマクリシュナはまた、思っただけで、あるいは相手の前にいるだけで、霊的な力を伝えることもできました。ある日、若い信者のターラク（後のスワーミー・シヴァーナンダジ）がパンチャヴァティの森で深く瞑想に浸っていました。この森はダクシネシュワルのカーリ寺院にあり、師が霊的修養を積んだ場所です。師はターラクのそばに行って、立ったまま彼を見ていました。ターラクはそこに師がいて自分を見ていることに気付いていませんでしたが、後に語ったところによると、彼はその時自分の奥深くに巨大な霊的パワーが湧き起こり「クンダリニ（潜在的な霊的エネルギー）」が目覚めるのを感じていました。シヴァーナンダジは、師がただ思っただけで人の「クンダリニ」を目覚めさせることができるのだと言っていました。

　ヴィヴェーカーナンダの兄弟のマヘンドラナート・ダッタは、『SriRamakrishner Anudhyan (SacredMemories of Sri Ramakrishna)』という素晴らしい著書の中で、シュリー・ラーマクリシュナはサマーディの境地にある時に、思いのままに霊的な力を周囲に向けて放つことができたと言っています。さらに、神への何らかの信仰を持つ人がこの霊的エネルギーゾーンに入ると、自分が霊的に高まるのを感じることができたそうです。このように、霊性を伝えるのに肉体が触れあうことは必ずしも必要ではなかったのです。

**静めの一触れ**

　シュリー・ラーマクリシュナは、一触れで霊的な流れを止めることもできました。例えば、皆で集まって霊性について語り合ったりキルタン（信仰歌）を歌ったりしていると、クンダリニに過度の霊的刺激を受けて意識を失う人が時折出たものでした。すると師は必要に応じて、信者に触れてクンダリニの上昇を止め、流れを下向きに変えて通常の意識に戻しておられました。また、師は相手の胸に軽く触れてから、瞑想に行きなさいと指示することもありました。触れられた信者の瞑想は深く長時間となったので、師は再び彼らに触れて効果を止め彼らが家に帰れるようにしてやりました。師はいつどのようにして誰に霊的目覚めを与えるかを決めていらっしゃいました。というのも、信者に十分な準備できていない時にクンダリニを目覚めさせてしまうと、いろいろと問題が起きる可能性があるからです。霊的目覚めを得る前に、人は霊的修行を積んで心も体も浄まっている必要があるのです。

　こんな例もあります。シュリー・ラーマクリシュナの甥のリドイは、悟りを得るために瞑想などの修行を長い間一生懸命に行っていました。師はリドイに、自分にはもう十分に仕えているしそんなに激しく修行する必要はないとおっしゃっていたのですが、リドイは全く聞き入れようとしませんでした。ある時リドイは霊的体験を得て、シュリー・ラーマクリシュナが神の化身で自分は聖なる従者であると叫び始めました。なぜダクシネシュワルなんかに引きこもって時間を無駄にしているんだ、二人は世界中を歩いて神の到来を告げ教えを説かなければ、と大声でわめき散らしたのです。師は静かにしてくれと必死に頼まれたのですがリドイは一向に収まりません。師は恥ずかしくなってリドイに触れ、「マーよ、リドイをお静め下さい！」とおっしゃいました。すると途端にリドイはいつもの状態に戻り、泣きながら言いました。「おじさん、何をするんですか。私はあんなにも霊的に高まっていたのに、おじさんのせいで台無しだ！」師はおっしゃいました。「わんぱく小僧め、私は静かにしてくれと頼んだじゃないか。私は深い霊的体験を何度もしているが、あんな風にわめいたりしないぞ。お前はわずかの目覚めを経験しただけで大騒ぎだ。私への奉仕はもう十分だと言ったのに、お前は全然聞かないんだね！」

**痛みのある接触**

　インドには、聖職者の足の塵を取ることで尊敬を表すと共に至福を受けるという伝統があります。『シュリー・ラーマクリシュナの福音』などの本から、師やホーリー・マザーは浄い人に触れられると何も問題はないが非常に世俗的な考えや行動を取る人に触られると痛みに苦しむことがあったのが分かります。そんな時、師とマザーの反応は違っていました。師は霊的体験を押さえようとはせず、そうした体験を周囲に見せるのにためらいはありませんでした。ですから、触れられて痛いことがあれば、相手が恥ずかしく思うことがあっても構わず痛みを表現していました。一方、シュリー・サーラダー・デヴィはマハーマーヤーの化身でしたから、霊的な恍惚状態にあっても触れられて不快な思いをしても、抑え隠すことができたのです。

　ある時、若い頃不道徳な人生を送っていた年配の家政婦がカーリ寺院に来て、シュリー・ラーマクリシュナの足に触れたことがありました。師は焼けるような痛みを感じて、ガンガーの水で何度も洗い流さないといけませんでした。また、ギリシュ・チャンドラ・ゴーシュの宗教的芝居を見に行った際には、芝居の後で数人の女優が師に触れて敬意を表しました。この女優らは不道徳な生き方をしていたのですが、師は触れられたことで特にマイナスな影響を受けることはありませんでした。

不純な人に触れられた時、なぜ師の反応にこのような違いが起きるのでしょうか。恐らく女優らの場合は、芝居の中で女神や信者の役を演じたすぐ後で内面的に浄められていたから、また心から師の恵みを受けたいと思っていたから、などが理由でしょう。師も、芝居を見たために触れられることに対し準備ができていたのかもしれません。

一方、家政婦の場合は、違った状況にあり心の準備が全くできていなかったわけです。こうした解釈はあくまで私たちの憶測に過ぎませんが、イエス・キリストの場合も、不道徳な生き方をしていたマグダラのマリアに触れて彼女を変えたという有名な例があります。

**今の私たちにどのようなプラスがあるのか**

　「師の一触れ」はずっと昔の出来事なのに、現代の私たちに一体どのような意義があるのでしょうか。私たちはシュリー・ラーマクリシュナにもホーリー・マザーにもすぐに会うことはできないのに、このような話が私たちとどのような関係があるのでしょう。皆さんの多くは、自宅に師やマザーの写真、ブッダの絵や像を置いていると思います。マザーは、私たちが絵や像、写真を神だと考えて篤く信仰し、深く礼拝や瞑想を行えば、その絵や像、写真に神が特別に姿を現されるとおっしゃいました。それは単なる紙切れや粘土、木ではなくなり、神がそこに住まわれるのです。ダクシネシュワルにあるカーリ母神の像は石でできていましたが、シュリー・ラーマクリシュナが強く信じ、愛し、礼拝したためにカーリ母神が本当にその像の中に姿を現したのです。私たちの信仰が十分な強さに達した時、師は私たちが持つ写真の中に住まわれるのです。その時信仰心を持ってその写真に触れれば、何かしらの恩恵を授かることでしょう。

　インドには神々の像がたくさんあり、ドゥルガ母神やカーリ母神などの女神や神に捧げる祭りがいろいろあります。これらの祭りでは最後に神の像が川に浸されるのですが、その前に信者らは敬愛と信仰の気持ちから像の足に触れます。信者らにとって像は粘土や石ではなく、神の現れなのです。こうして触れることで、恩寵をいただく、浄められる等の霊的恩恵を受けたいと願っているのです。このように、現代に生きる私たちも聖なる一触れから恩恵に与ることができるのです。